

受験番号「

」 氏名「

」

受験者は、配点の基準を選択することができます。

下記のA・B・Cの内から一つを選び、その記号

を○で囲みなさい。

A		1	40点	2	40点	3	20点
B		1	60点	2	20点	3	20点
C		1	20点	2	60点	3	20点

1 古典文学

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

下総国に御家人ありけり。[※]領家の代官と相論する事あつて、度々問答しけれども、事ゆかずして、鎌倉に

て対決しけり。[※]泰時、御代官の時なりけるに、地頭、領家の代官と重々問答して、領家の方に肝心の道理を

申し述べたりけるとき、地頭手をはたはたと打ちて、泰時の方へ向きて、「あら負けや」と云ひたりけると

き、^A座席の人々一同に、「は」と笑ひけるを、泰時うちうなづきて、「いみじく負け給ひぬる物かな。泰時、

御代官として年久しく、かくの如く成敗仕るに、『あはれ負けぬる物を』と聞く人も、叶はぬ物ゆゑに、一

言も陳じ申す事にて、よそよりこそ負けに落とさるれ、^B我と負けたる人、未だ承らず。前の問答は、互ひに

さもと聞えき。今領家の御代官の申さるる所、肝心と聞ゆるに、陳状なく負け給ひぬる事、返す返すいみじ

く聞え候ふ。正直の人にておはするにこそ^Cとて、涙ぐみて讃られければ、笑ひつる人々もにがりてぞ見え

ける。さて領家の代官、「日來の道理を聞きほどこき給ひ、ことさらにひが事にはなかりけり」とて、六年が未[※]

進の物、三年をば許してけり。情けありける人なり。これこそ、^D負けたればこそ勝ちたれの風情なれ。

されば、人の物の道理を知り、正直なるべき物なり。^E失を犯しても、物の道理を知りて我がひが事と思ひ

て、正直に失を顕はし恐れ慎めば、その失許さるるなり。失とも思はず、隠し、そら事をもてあやまらぬ由

を云ふは、いよいよ失も重し。仏法の中の懺悔もこの心なり。心地観經に云はく、「若し罪を隠せば罪いよ

いよ増長し、発露懺悔すれば罪即ち消滅す」といへり。木の根に土を置けば木いよいよよきかえ、根をあらは

せば木の枯るるに喩ふ。^E罪障の木を枯らさんと思はば、発露懺悔して根をあらはすべし。

『沙石集』より

※注 領家の代官——莊園領主の代理人。

鎌倉——鎌倉幕府の問注所(訴訟機関)。

泰時——北条泰時。鎌倉幕府第三代執権。

地頭——ここでは前出の「御家人」のこと。

未進の物——未納の年貢。

問一 傍線部A「座席の人々一同に、「は」と笑ひける」について、なぜそのようなになったのか。簡潔に説明しなさい。

問二 傍線部B「我と負けたる人」を、現代語訳しなさい。

問三 傍線部C「おはするにこそ」の後に省略されている語句を、答えなさい。

問四 傍線部D「負けたればこそ勝ちたれの風情なれ」とは、どういうことか。この一話の内容を踏まえて説明しなさい。

問五 傍線部E「罪障の木を枯らさんと思はば、発露懺悔して根をあらはすべし」とは、どのような意味か。具体的に説明しなさい。

次のA・Cは小説の冒頭部、Bは詩の全文です。後の問い(①・②)に答えなさい。

A

廻れば大門の見返り柳いと長けれど、お齒ぐる溝に燈火うつる三階の騒ぎも手に取るごとく、明けくれなしの車の行来にはかり知られぬ全盛をうらないて、大音寺前と名は仏くさけれど、さりとて陽気の町と住みたる人の申き、三嶋神社の角をまがりてよりこれぞと見ゆる大庭もなく、かたぶく軒端の十軒長屋二十軒長や、商いはかつつ利かぬところとて半さしたる雨戸の外に、あやしき形に紙を切りなして、胡粉ぬりくり彩色のある田楽みるよう、裏にはりたる串のさまもおかし、一軒ならず二軒ならず、朝日に干して夕日にしもう手当ことごとしく、一家内これにかかりてそれは何ぞと問うに、知らずや霜月酉の日例の神社に欲深様のかつぎたもうこれぞ熊手の下ごしらえという、正月門松とりするよりかりて、一年うち通しのそれは誠の商売人、片手わざにも夏より手足を色どりと、新年着の支度もこれをば当てぞかし、南無や大鳥大明神、買う人にさえ大福をあたたまたまえば製造もとのわれら万倍の利益をと人ごとに言うめれど、さりとて思いのほかなるもの、このあたりに大長者のうわさも聞かざりき、住む人の多くは廊下にて良人は小格子の何とやら、下足札そろえてがらんがらの音もいそがしや夕暮より羽織引かけて立出れば、うしろに切火打かくる女房の顔もこれが見納めか十人ぎりの側杖無理情死のしこね、恨みはかかる身のはて危うく、すわと言わば命がけの勤めに遊山らしく見ゆるもおかし、娘は大籠の下新造とやら、七軒の何屋が客廻しとやら、提燈さげてちよこちよこ走りの修業、卒業して何になる、とかくは檜舞台と見たつももおかしからずや、垢ぬけのせし三十あまりの年増、小ざつぱりとせし唐棧ぞろいに紺足袋はきて、雪駄ちやらちやら忙がしげに横抱きの小包はとわでもしるし、茶屋が棧橋とんと沙汰して、廻り遠やここからあげまする、誂え物の仕事やさんとこのあたりには言うぞかし、一体の風俗よそと変りて、女子の後帯きちんとせし人少なく、がらを好みて幅広の巻帯、年増はまだよし、十五六の小癩なるが酸漿ふくんでこの姿はと目をふさぐ人もあるべし、所が是非もなや、昨日河岸店に何紫の源氏名耳に残れど、きょうは地廻りの吉と手馴れぬ焼鳥の夜店を出して、身代たたき骨になれば再び古巣への内儀姿、どこやら素人よりは見よげに覚えて、これに染まらぬ子供もなし、秋は九月仁和賀の頃の大路を見たまえ、さりとてはよくも学びし露八が物真似、栄喜が処作、孟子の母やおどろかん上達の速やかさ、うまいと褒められて今宵も一廻りと生意気は七つ八つよりつりて、やがては肩に置手ぬぐい、鼻歌のそそり節、十五の少年がませかた恐ろし、学校の唱歌にもぎつちふんちふんと拍子を取りて、運動会に木やり音頭もなしかねまじき風情、さらでも教育はむずかしきに教師の苦心さこそと思わるる入谷ぢかくに育英舎とて、私立なれども生徒の数は千人近く、狭き校舎に目白押の窮屈さも教師が人望いよいよあらわれて、ただ学校とひと口にてこのあたりには吞込みのつくほどなるがあり、通う子供の数々にあるいは火消人足、おとっさんは刎橋の番屋に居るよと習わずして知るその道のかしこさ、梯子のりのまねびにアレ忍びがえしを折りましたと訴えのつべこべ、三百という代言の子もあるべし、お前の父さんは馬だねえと言われて、名のりや愁らき子心にも顔あからめるしおらしさ、出入りの貸座敷の秘蔵息子寮住居に華族さまを気取りて、ふさ付き帽子面もちゆたかに洋服かるがるとはなばなしきを、坊ちゃん坊ちゃんとしてこの子の追従するもおかし、多くの中に龍華寺の信如とて、千筋となす黒髪も今いく歳のさかりにか、やがては墨染にかえぬべき袖の色、発心は腹からか、坊は親ゆずりの勉強のあり、性来おとなしきを友達いぶせく思いて、さまざまの悪戯をしかけ、猫の死骸を縄にくくりてお役目なれば引導をたのみますと投げつけしこともありしが、それは昔、今は校内一人の人とて仮にも侮りての処業はなかりき、歳は十五、並背にていが栗の頭髪も思いなし俗とは変りて、藤本信如と訓にてすませど、どこやら釈といいたげの素振なり。

B

まつくろけの猫が二疋^{ひき}、
なやましいよるの家根のうへで、
びんとたてた尻尾^{しっぽ}のさきから、

糸のやうなみかづきがかすんでゐる。

『おわあ、こんばんは』

『おわあ、こんばんは』

『おぎやあ、おぎやあ、おぎやあ』

『おわああ、ここの家の主人は病氣です』

年中借金取が出はいりした。節季はむろんまるで毎日のことで、醬油屋、油屋、八百屋、鰯屋、乾物屋、炭屋、米屋、家主その他、いずれも厳しい催促だった。路地の入口で牛蒡、蓮根、芋、三ツ葉、蒟蒻、紅生薑、鰯など一銭天婦羅を揚げて商っている種吉は借金取の姿が見えると、下向いてにわかに鰻鮎粉をこねる真似した。近所の小供たちも、「おっさん、はよ牛蒡揚げてんかいナ」と待てしませんがなく、「よっしゃ、今揚げたアるぜ」というものの搦鉢の底をこしこしやるだけで、水漬の落ちたのも気付かなかった。

種吉では話にならぬから素通りして路地の奥へ行き種吉の女房に掛け合おうと、

「人さまの家の板の間たたいて、あんた、それでよろしおまんのか」と血相かえるのだった。「そこは家の神様が宿ったはるところだつせ」

芝居のつもりだがそれでもやはり興奮するののか、声に涙がまじる位であるから、相手は驚いて、「無茶いいなはんナ、何も私はたかしまへんぜ」とむしろ開き直り、二三度押問答のあげく、結局お辰はいい負けて、素手では帰せぬ羽目になり、五十銭か一円だけ身を切られる想いで渡さねばならなかった。それでも、一度だけだが、板の間のことをその場で指摘されると、何ともいい訳けのない困り方でいきなり平身低頭して詫言を入れ、ほうほうの体で逃げ帰った借金取があったと、きまつてあとでお辰の愚痴の相手は娘の蝶子であった。

そんな母親を蝶子はみっともないとも哀れとも思った。それで、母親を欺して買食いの金をせしめたり、天婦羅の売上箱から小銭を盗んだりして来たことが、ちよつと後悔された。種吉の天婦羅は味で売ってなかなか評判よかったが、そのため損をしているようだった。蓮根でも蒟蒻でもすこぶる厚身で、お辰の目にも引き合わぬと見えたが、種吉は算盤おいてみて、「七厘の元を一銭に商って損するわけはない」家に金の残らぬのは前々の借金で毎日の売上げが喰込んで行つた

めだとの種吉の言い分はもつともだったが、しかし、十二歳の蝶子には、父親の算盤には炭代や醬油代がはいっていないと知れた。

天婦羅だけでは立ち行かぬから、近所に葬式があるたびに、駕籠かき人足に雇われた。氏神の夏祭には、水着を着てお宮の大提燈を担いで練ると、日当九十銭になった。鎧を着ると三十銭あがりだった。種吉の留守にはお辰が天婦羅を揚げた。お辰は存分に材料を節約したから、祭の日通り掛りに見て、種吉は肩身の狭い想いをし、鎧の下を汗が走った。

よくよく貧乏したので、蝶子が小学校を卒えると、あわてて女中奉公に出した。俗に、河童横町の材木屋の主人から随分と良い条件で話があったので、お辰の頭に思いがけぬ血色が出たが、ゆくゆくは妾にしるとの肚が読めて父親はうんと言わず、日本橋三丁目の古着屋へばかに悪い条件で女中奉公させた。河童横町は昔河童が棲んでいたといわれ、忌われて二束三文だったその土地を材木屋の先代が買い取って、借家を建て、今はきびしく高い家賃も取るから金が出来て、河童は材木屋だと陰口きかれていたが、妾が何人もいて若い生血を吸うからという意味もあるらしかった。蝶子はむくむく女めいて、顔立ちも小ぢんまり整い、

材木屋はさすがに炯眼だった。

日本橋の古着屋で半年余り辛抱が続いた。冬の朝、黒門市場への買出しに廻り道して古着屋の前を通り掛った種吉は、店先を掃除している蝶子の手が赤ざれて血がにじんでいるのを見て、そのままだいって掛け合い、連れ戻した。そして所望されるままに曾根崎新地のお茶屋へおちよぼ（芸者の下地ッ子）にやった。

問① A・B・Cの作品名と作者名を記しなさい。

作品名			作者名		
A	〔	〕	〔	〕	〕
B	〔	〕	〔	〕	〕
C	〔	〕	〔	〕	〕

問② A・B・Cの中から一つを選び、作品の内容・表現（視点や語り手、文体、技法など）について説明しなさい。文学史的意義に関する記述をもって説明にかえてもかまいません。

3 文学史

次の日本文学史上の用語（ア）～（エ）について簡潔に説明しなさい。

（ア）『和漢朗詠集』

（イ）能・狂言

（ウ）川端康成

（エ）アララギ派